古典経営研究　No.３

2023.02.15

投資とは何か？

状況判断と機会をいかにして掴むか

投資対象に全力、全財をかける

“奇貨可居”という話を考え抜く

差出人: yamauchi masaki masaki_yamauchi@hotmail.com
件名: 奇货可居
日付: 2023/02/14 4:44:22
宛先: masaki_yamauchi@hotmail.com

呂不韋是陽翟的大商人，他往來各地，以低價買進，高價賣出，所以積累起千金的家產。

秦昭王四十年（前267），太子去世了。到了昭王四十二年，　把他的第二個兒子安國君立為太子。而安國君有二十多個兒子。安國君有個非常寵愛的妃子，立她正夫人，稱之為華陽夫人。華陽夫人沒有兒子。

安國君有個排行居中的兒子名叫子楚，子楚的母親叫夏姬，不受寵愛。子楚作為秦國的人質被派到趙國。秦國多次攻打趙國，趙國對子楚也不以禮相待。 子楚是秦王庶出的孫子，在趙國當人質，他乘的車馬和日常的財用都不富足，生活困窘，很不得意。

そのときに呂不韋は商用で邯鄲（趙の都）に出かけ、子楚に出会い、気にいって、「この奇しい貨は居えておかなくちゃ」とつぶやくと、すぐに出かけて子楚に目通りし、述べた、「てまえはあなたさまの門（家を意味する）を大きくしてさしあげられますが」。、、、、

呂不韋到邯鄲去做生意，見到子楚後非常喜歡，說："子楚就像一件奇貨，可以屯積居奇。以待高價售出"。於是他就前去拜訪子楚，對他遊說道："我能光大你的門庭。"子楚笑著說："你姑且先光大自己的門庭，然後再來光大我的門庭吧！"呂不韋說："你不懂啊，我的門庭要等待你的門庭光大了才能光大。"子楚心知呂不韋所言之意，就拉他坐在一起深談。

呂不韋說："秦王已經老了，安國君被立為太子。我私下聽說安國君非常寵愛華陽夫人，華陽夫人沒有兒子，能夠選立太子的只有華陽夫人一個。現在你的兄弟有二十多人，你又排行中間，不受秦王寵倖，長期被留在諸侯國當人質，即使是秦王死去，安國君繼位為王，你也不要指望同你長兄和早晚都在秦王身邊的其他兄弟們爭太子之位啦。"

子楚說："是這樣，但該怎麼辦呢？"呂不韋說："你很貧窘，又客居在此，也拿不出什麼來獻給親長，結交賓客。我呂不韋雖然不富有，但願意拿出千金來為你西去秦國遊說，侍奉安國君和華陽夫人，讓他們立你為太子。"子楚於是叩頭拜謝道："如果實現了您的計劃，我願意分秦國的土地和您共享。"呂不韋於是拿出五百金送給子楚，作為日常生活和交結賓客之用；

又拿出五百金買珍奇玩物，自己帶著西去秦國遊說，先拜見華陽夫人的姐姐，把帶來的東西統統獻給華陽夫人。順便談及子楚聰明賢能，所結交的諸侯賓客，遍及天下，常常說"我子楚把夫人看成天一般，日夜哭泣思念太子和夫人"。夫人非常高興。

呂不韋乘機又讓華陽夫人姐姐勸說華陽夫人道："我聽說用美色來侍奉別人的，一旦色衰，寵愛也就隨之減少。現在夫人您侍奉太子，甚被寵愛，卻沒有兒子，不趁這時早一點在太子的兒子中結交一個有才能而孝順的人，立他為繼承人而又像親生兒子一樣對待他，那麼，丈夫在世時受到尊重，丈夫死後，自己立的兒子繼位為王，最終也不會失勢，這就是人們所說的一句話能得到萬世的好處啊。不在容貌美麗之時樹立根本，假使等到容貌衰竭，寵愛失去後，雖然想和太子說上一句話，還有可能嗎？

現在子楚賢能，而自己也知道排行居中，按次序是不能被立為繼承人的，而他的生母又不受寵愛，自己就會主動依附于夫人，夫人若真能在此時提拔他為繼承人，那麼夫人您一生在秦國都要受到尊寵啦。"華陽夫人聽了認為是這樣，就趁太子方便的時候，委婉地談到在趙國做人質的子楚非常有才能，來往的人都稱讚他。

接著就哭著說："我有幸能填充後宮，但非常遺憾的是沒有兒子，我希望能立子楚為繼承人，以便我日後有個依靠。"安國君答應了，就和夫人刻下玉符，決定立子楚為繼承人，安國君和華陽夫人都送好多禮物給子楚，而請呂不韋當他的老師，因此子楚的名聲在諸侯中越來越大。

春秋戦国時代の友情
（奇貨居くべし③）

11 月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2022 年 11 月 21 日(月)

秦の始皇帝は、若き頃の「子楚、荘襄王」の子である。
子楚はかつて趙の国の人質となっていたころ、呂不韋の愛妾を見初めてもらい受けた。**この夫人から生まれたのが始皇帝である。**

呂不韋は陽翟の大商人であった。
諸国を往来し、品物を安い時に仕入れておいては、時期を見て高く売りさばくという商法で、千金の富を築いた。
秦では昭王の四十年に太子が亡くなり、次男の安国君が太子となった。安国君には二十余人の男子がいたが、寵愛する正夫人の華陽夫人には実子がなかった。その二十余人の中に「子楚」という者がいた。
子楚は人質として趙に送られた数多い妾腹の一人であり、しかも人質の身であるため日々の生活にもことかく始末だった。
呂不韋が商用で趙の都、邯鄲に出向いたとき、たまたま「子楚」を見かけ、「奇貨居くべし」、これは掘り出し物だ、買っておこうと言ったのが物語の始まりであった。

呂不韋は子楚を訪問して、「あなたの父君である太子の安国君と華陽夫人の二十余人居る後継者の中から、あなたを後継ぎにさせるよう二人で工作しましょう」と言った。**子楚には思いがけない話であったが、呂不韋を信じた。**
二人は相談して、「子楚が安国君と華陽夫人を心から敬慕していること」を伝えて近づき、**華陽夫人には、「色をもって人に使うる者は、色衰えて愛弛む」と説き、華陽夫人を尊敬する子楚が太子になるように、そして、後には王位につくように華陽夫人に後見を頼み込んだ。**

呂不韋と子楚は互いが将来のために図り、呂不韋は彼の愛妾を子楚に与え、子楚との間には、予定日よりも二ヶ月も遅れて男の子（政、後の始皇帝）が生まれた。
秦の昭王は在位五十六で世を去り、太子安国君が即位(孝文王)し、華陽夫人が王妃となり子楚は太子となった。新王孝文王はわずか一年にして亡くなり、代わって子楚が即位して荘襄王となって、**呂不韋と子楚の計画は成功した。荘襄王は恩のある呂不韋を承相とし、文信侯に封じた。しかし荘襄王は在位三年で世を去り、太子の政（後の始皇帝）が十三歳で秦王となった。そして、呂不韋の時代が来た。**

参考：（司馬遷史記、呂不韋列伝）